

## 深夜の宴

「退屈ね」

亜沙美はカードを投げ出した。何時間も同じゲームを続けていた。理恵も思いは同じだった。亜沙美は十五歳。中学三年生。早熟な美少女だった。小柄で痩せたしなやかな身体つきだが、胸はびっくりするほど大きい。大きな瞳が野性的に輝いていた。

家庭教師の理恵は大学一年生。十八歳。背が高く、脚の長いスレンダーな美人。

この日、理恵は泊まり掛けで亜沙美の受験勉強に付き合はずだった。亜沙美の家を訪れると、両親は旅行で不在だった。

どうせあたしがあんな名門高校、受かるわけじゃないじゃん。亜沙美は平気で言う。親がうるさいから一応受けるけどさ、苦労していい学校出て、で、どうなるの？ いい会社に入って、結婚相手を探せて？ やだね、そんなの。

成績はあまりよくないが、頭は決して悪くない。奔放な性格が、学校の勉強に向いていないだけだということは、理恵にもよく分かっていた。

というわけで、そこそこに勉強を切り上げ、ずっとトランプをして遊んでいたのである。

「退屈……か」

退屈だった。大学も退屈、遊びも退屈。刺激的なことは何ひとつない。都会の女の子が夢中に

なるべきものは一通りこなしした理恵だったが、何をやっても結局、虚しさしか残らないことを十八歳の彼女はよく心得ていた。人生って、退屈な日常生活をただこなし、そして老いてゆく、ただそれだけ……。

「あーあ、なんか刺激が欲しいなあ、そう思わない？」

亜沙美はベッドに仰向けに寝ころんだ。豊かな張りのある乳房がTシャツの胸を盛り上げ、かすかに揺れていた。

「そうねえ……」

「ね、理恵さんって処女じゃないんでしょ」

亜沙美が天井を向いたまま言った。

「まあね」

「男と寝るって楽しい？」

「相手によるんじゃないの？」

理恵は煙草に火をつけながら答えた。

「私は……別に楽しくなかった」

「ふーん」

亜沙美は処女なのかな。豊かな胸や野性的なキュートさを見れば、とっくに経験済みかと思っ  
ていたのだが。理恵は呟いた。

「私に寄ってくる男って、なんか、情けないのばかり……」

亜沙美はしばし黙っていたが、やがて口を開いた。

「ね、男の金玉を蹴ったことってある？」

理恵は亜沙美を見つめた。亜沙美は上半身を起こして理恵を見ていた。瞳が輝いている。理恵は答えた。

「私はない。亜沙美はあるの？」

「こないだ。面白かったよお。しばらく立ち上がることもできなくて、わんわん泣いちゃってさ」「誰を蹴ったの？」

「痴漢。いきなり抱きついてきたから、思わず膝で蹴っちゃったの。逃げようと思ったけど、う  
ずくまって泣いているから、ぼこぼこにしてやった。気持ちよかったよお」

夢中になって話す亜沙美の口調に、理恵は「そんなに面白いものなの？」と呟いた。

「面白かったね。最近、刺激的な出来事ってそのくらいだな」

「面白いかもね。大の男を泣かすなんて、滅多にできることじゃないもの」

「ねね。理恵さんもやってみない？」

「私が？ まさか」

理恵は苦笑した。喧嘩など一度もしたことないのだ。

「大丈夫だよ。私だってなかったもん」

亜沙美はもう立ち上がった。

「どう？ 今から外に出てき。一番最初に出会った男をここに連れ込むってのは？ 縛り上げて、金玉蹴ってやるんだよ」

「それ、犯罪じゃないの？」

「平気平気。裸にして写真撮って、ばらしたら写真をネットか何かにつけるぞって脅してやりゃあ、誰にもわかんないよ。ね、やろうよお」

理恵は肩をすくめ、立ち上がった。興味がなくなかった。

亜沙美の家は、高級住宅街にある。すでに午前二時。人通りは絶えていた。

一人のサラリーマンらしい男が現れた。小柄で、眼鏡をかけた気の弱そうな三十代の男だった。

亜沙美はついと進み出て、男に歩み寄った。男が顔をあげて亜沙美を見た。

「ちょっといいですか？」

亜沙美はにこにこして男の前に立った。男は不審げに亜沙美を見下ろした。

「ぐっ」

突然、男が前かがみになった。亜沙美が男の股間を膝で蹴りあげたのだ。理恵が駆け寄り、男をつかんで家の中に引きずり込んだ。

「な、なにをするんだ」

男は、両手首を縛られ、壁に背中をついて天井につり下げられていた。

亜沙美はにやにやしながら男のズボンの股間を手の甲で叩いた。男が悲鳴をあげ、涙を流して身を振った。

「ね、このとおり」

亜沙美は得意そうに理恵を見た。

「蹴られた痛みがまだ残ってるんだよ。ちょっと触っただけでも、そういう痛いみたいなんだよね」

「ふうん」

理恵は男の顔を見た。そうとう痛そうだ。息をすることもできず、うなだれ、歯を食いしばって堪えている。

「理恵さんもやってみなよ」

亜沙美に促され、理恵は男の陰囊を掌で包んだ。陰囊の感触を掌で感じたたん、男がびくつと痙攣して呻いた。理恵もちよつと驚いた。

「見てみようか」

亜沙美は、男のベルトをはずしズボンとブリーフをずりさげた。

「わあ、きったねえの」

亜沙美は男の生殖器を見て叫んだ。

「見るのは初めて？」

「うん」

発達したボディの持ち主だが、亜沙美は処女だった。二人は男の陰囊をしげしげと観察した。陰囊の左側が右側に比べてちよつと大きめである。

「左側が腫れてるみたいね」

「あ、そうか。さっき蹴ったとき、膝の右つかわになんか感触があったけど、なるほどねえ、左側の玉に命中したんだね。あれって結構デリケートで、すぐ腫れちゃうらしいけど」

「右側は平気かしら」

理恵は右側の睾丸をつまんで見た。男は、脂汗をかいて女たちの所業を見下ろしていたが、たいした変化はない。

「なるほどね。蹴られてないほうは、触っても平気ってわけね」

「じゃあ、右側は理恵さんが蹴ってみれば」

「やめろ！」

男が怒鳴った。

「もう帰してくれ。帰してくれたら、君らのことは訴えない。だが、これ以上何かやったら、ただじゃすまないぞ」

「うるさいよ、おやじ」

亜沙美は笑って言い、学習機の引出しからデジタルカメラを取り出して構えた。男は慌てて顔を背けたが、亜沙美はシャッターを押した。

「おじさん、名刺みたけど、お役人なんだから、こんな姿を写真に撮られたら、やばいんじゃないの？」

男は無言で亜沙美を睨みつけた。

「いいから理恵さん、遠慮せずに蹴りなよ」

亜沙美に促され、理恵は男の前に立った。膝を曲げ、軽く男の陰囊の右側に押し当てた。

「や……やめろ……」

男は涙声で懇願した。

「た、頼む……」

だが、理恵は耳を貸さなかった。恐怖に怯える男の表情に、彼女は久しぶりの、いや、生まれて初めての快感を味わっていた。大の男を完全に支配しているという思いが、彼女を夢中にさせていたのだ。

理恵は狙いを定め、思い切り膝を蹴りあげた。膝があやまたず男の右の睾丸に命中した。理恵は膝を睾丸に押しつけたまま、さらに思い切り跳ねあげた。男は理恵と同じくらいの身長だったが、股下は理恵のほうがはるかに長かった。男の爪先が宙に浮いた。

「ぎゃあああああああ！」

男が絶叫した。顔をがくがくと左右に振って咳き込んだ。下半身がびりびりと痙攣していた。

「すっごーい！」

亜沙美が歓声をあげた。

「いま、宙に浮いてたよ。すごい蹴りだったねえ」

理恵は、しばらく、顔を蒼白にして激痛に喘ぐ男を眺めていたが、亜沙美の声に我に帰った。

亜沙美がしげしげと男の股間に顔を近づけて、また叫んだ。

「わあ、今度は右側のほうが大きくなっちゃってる」

理恵は男の股間に視線を落とした。たしかに、右側のほうがさらにひどく腫れあがっていた。

亜沙美がにやにやししながら、右側の陰囊を指ではじいた。

「もう、やめてくれえ」

男が泣き叫んだ。激しく身を振り、目から涙をぼろぼろ流していた。

「お願いします。もう我慢できません。許してください」

「許す？」

理恵は冷たく言った。

「何を許すの？ あなたは何も悪いことしてないじゃない」

亜沙美がげらげら笑った。

「そうだよねえ。許してもらわなきゃならないのは私たちだもんねえ」

「じゃ……じゃ、なんでこんなことを……」

嗚咽しながら男は声を絞り出した。

「決まってるじゃん」

亜沙美は左手で男の顎をつまんで持ち上げ、右手で男の両の睾丸を包みこむように陰囊を鷲掴みにした。男がまた悲鳴をあげた。

「退屈しのぎだよ」

亜沙美が右手に力をこめた。男は激しく首を左右にふり、やがてがつくりとうなだれた。

「死んじやった……」

亜沙美が呟いた。

「まさか、息してるじゃない」

理恵の顔も紅潮していた。

「失神してるだけだよ」

男が再び意識を取り戻したのは二時間後だった。失神しながらも、男は下半身全体を覆う激しい痛みと、絶え間なくこみあげる嘔吐感に苛まれていた。

目を開けたが、涙で視界が曇っていた。涙を拭い、手足のいましめがほどこれていることに気

づいた。

「あら、起きたの？」

見れば、女二人がベッドにあぐらをかいて、トランプをやっていた。

亜沙美が立ち上がり、男の傍らに立った。

「タマの具合はいかが？」

ベッドの上の理恵が笑った。

「あらあら、すっかり腫れちゃってるねえ。どうする？ もう使えないかもよ」

「使えなくていいんじゃないの？」

理恵が言葉を添えた。

「女にもてるとはどうい思えない顔だしさ」

「い………いったい、君らは……」

男が苦しげに言った。

「こ、こんなことをして……許されるんでも思っているのか」

「さつきは許してくれ、なんて泣いてたくせにさ」

亜沙美が嘲笑し、いきなり踵を押しつけるように股間を蹴った。男は悲鳴をあげ、両手で股間を押さえて床に転がり悶絶した。

「そろそろ夜が明けるよ。お開きにしない？」

理恵が言った。

「そうねえ。明るくなったら面倒だしね。このまま帰ってもらおう？」

「まさか」

理恵は立ち上がった。

「ここまでできたんだもの。毒を食らわば何とやらよ」

亜沙美は、意味を悟ってくつくつと笑った。男が怯えたように顔をあげた。

「……な、なにをする気だ」

「亜沙美、最初の一個はあんたがやりたな」

理恵は男の背後に回り、はがい締めにして立たせた。

「……た、たのむ。もう帰らせてくれ……」

男は再び泣き出していた。亜沙美は頬を紅潮させて男の前に立った。

「や、やめてくれ。頼む」

亜沙美は答えずにつこりと邪悪な微笑みを浮かべ、男の股間を爪先で蹴った。

男は絶叫した。膝をつきそうになったが、理恵が支えた。亜沙美は、男の陰囊に手を伸ばし、つぶやいた。

「まだ、潰れてないみたいね」

再び脚を折り曲げ、勢いをつけて蹴りあげた。男はもはや叫ぶ気力もなかった。血反吐をはき、

激しく痙攣し、再び失神した。

「どう？」

男を支えていた理恵が訊ねた。

「手応え、あったよ」

亜沙美は男の陰囊を掌に包んだ。掌のなかで陰囊が膨張しはじめていた。まさぐってみたら、固い肉塊は一つしかない。

「やったあ！」

亜沙美はガッツポーズをした。

「潰したよ！ たしかに潰したよ！」

「え、どれどれ」

理恵は、男の床に転がし、仰向けにして陰囊をまさぐった。

「ほんとか、一個しかない！」

「後の一個は理恵さんにあげるね」

「そうねえ。でも……」

理恵は男を見下ろした。

「失神したまんまじゃつまんないなあ」

「じゃ、起きるまで、待ちますか」

亜沙美はぎらぎら光る眼で理恵を見つめた。薄いＴシャツに覆われた大きな乳房が上下していた。理恵は、ふとその乳房に触れてみたくなった。右手をのばし、乳房を覆った。亜沙美がせつなそうに身を振った。理恵は、亜沙美の小さな体を抱き寄せた。

男が目を覚ましたとき、すでにすっかり夜は明けていた。だが、室内にはカーテンが下ろされ、煌々と蛍光灯がついている。

「あ、起きたみたい」

男は起き上がることもできなかった。全身が痺れていた。股間の痛みだけが激しく下腹部で渦巻いていた。口の中に血の臭いがたちこめ、絶え間ない悪寒に皮膚が細かく揺れ続いていた。

「一個、潰れちゃったよ」

亜沙美が男の前に立ち、にこにこして言った。

「もう使い物にならないね」

男の眼に涙が溢れた。なんとという不条理だろう。何も悪いことはしていないのに、小娘どもの退屈しのぎの玩具にされ、不能になってしまおうとは……。

「そうでもないみたいよ」

理恵が言った。

「一個残っていれば、じゅうぶんに生殖機能は果たせるって何かで読んだ記憶がある」

「ふーん、ほんとかなあ」

「やってみようか」

理恵が男の股間にしゃがみこみ、萎びたペニスをつまみあげた。理恵は、テクニクには自信があった。巧みに指を動かした。男は目を閉じて呻いていたが、やがてペニスが次第に固くなってきた。

「ふふ……見て、さきつぼが濡れてきたでしょ」

「ほんとだ」

「これ、我慢汁っていうの。もうすぐ射精するよ。射精した瞬間に、もう一個潰すからね」

男が、顔をあげた。口をばくばくさせた。理恵は微笑んだ。

「気持ちいいでしょ」

男は必死で何かを訴えていたが、やがて力尽きたか、ぐったりと頭を床につけた。絶望的な嗚咽が漏れた。すっかり打ちひしがれた男のていらくに、理恵は勝利の味を噛みしめた。

理恵は男の小さなペニスを握りしめ、上下に激しくこいた。やがて、男のペニスの先端から、血の混じった精液が勢いよく迸った。

同時に、男は絶叫した。腹の底から絞り出すような、恐ろしい咆哮だった。

理恵は、男が射精すると同時に、残った一つの睾丸に拳を叩きつけたのだ。睾丸は、理恵の拳と床の間で、呆気なくぺしゃんこになった。

男は死ななかった。意識があるのかどうか、ただ痙攣しているだけだった。理恵と亜沙美は、男の傍らでもう一度レズセックスに耽り、寝た。二人が空腹を覚えて目を覚ましたときはすでに深夜だった。男はまだ息をしていた。

「起きな」

顔をびしゃびしゃ叩いた。男は目を開けた。訳の分からないことを呟き、視線が虚空をさまよっていた。だらりと開いた唇から涎が垂れていた。

理恵と亜沙美は、男を理恵の車のトランクに詰め、遠くの人けのない公園に捨てた。男はそのまま絶命するかもしれない。そうなくても、少女たちが後悔することはないだろう。

亜沙美の両親が帰宅するまであと一週間ある。一週間でさらに十四個の睾丸を潰してやるう。二人は楽しげに笑いながら、再び亜沙美の家に帰るべく、首都高を飛ばした。

(1999・11・16)